

アナログ観測記録のデータベース化とその利用

Construction and use of a database for analogue records and documents

家森 俊彦 [1]; 小田木 洋子 [2]; 能勢 正仁 [3]; McCreadie Heather[4]; 竹田 雅彦 [5]; 亀井 豊永 [6]

Toshihiko Iyemori[1]; Yoko Odagi[2]; Masahito Nose[3]; Heather McCreadie[4]; Masahiko Takeda[5]; Toyohisa Kamei[6]

[1] 京大・理・地磁気; [2] 京大・理・地磁気; [3] 京大・理 地磁気資料解析センター; [4] 京大・理; [5] 京大・理・地磁気センター; [6] 京大・理・地磁気センター

[1] WDC for Geomag., Kyoto Univ.; [2] WDC for Geomag, Kyoto; [3] DACGSM, Kyoto Univ.; [4] WDC for Geomag, Kyoto; [5] Data Analysis Center for Geomag.and Space Mag., Kyoto Univ.; [6] WDC-C2 Geomag., Kyoto Univ.

<http://swdcwww.kugi.kyoto-u.ac.jp/>

地磁気観測の分野でデータのデジタル取得が本格的になったのは1980年代半ば以降であるのに対し、アナログ連続観測自体は前世紀半ばから始まり、1957-1958年の国際地球観測年(IGY)を契機に全世界に広がり、データ量が急増した。過去の長期間の観測データ、特にIGY以降50年近くに亘るアナログデータについては、観測所数と観測期間の積が、デジタル観測データの2倍以上あり、オンライン化して世界中の研究者からインターネット経由でまだまだ活用されるべき貴重なデータである。地磁気世界資料センターでは数年前からアナログマグネトグラムのデジタル画像ファイル化を行なうと共に、データのデジタル数値化の開発の試みも行ってきた。当発表では、その現状を紹介すると共に、データのデジタル数値化とその応用を、1960年のチリ大地震の時に観測された津波による地磁気変動を例として示す。